

ある日このような言葉を聞いた。「フランス人はこう言っているよ」「イタリア人だからといって、みんながみんな詩を解るわけではない」私がどちらを信じるかという後者である。前者も決して街中の誰彼かまわず聞いた結論ではないが、音楽関係者であっても感性の個人差はあるし、勉強の度合いは千差万別である。特に言葉を扱う者は「原詩の忠実な伝達者」の枠を超えて「自己の性格に基づく咀嚼表現者」に容易になりうる。訳詩家は語彙の多い外国語の歌を短い日本語にまとめて伝わりやすい表現に変換し、歌手は観客の感動を誘うドラマティック表現法を考えて他人とは違う自分をアピールする。この経緯で原詩の大部分は見えにくくなる。では原詩の感覚をできるだけ残すにはどうしたらよいか?となると、やはり最初の訳詩家の担うところは大きいだろう。だが当然要約しきれない部分は次の歌手の感性に委ねられるから、結局のところ参考書代わりになる対訳に頼るところが大きいかもしれない。

そこでまた『愛の讃歌』を考える。冒頭の「青空が落ちてくるかもしれない、大地が崩れるかもしれない」という言葉は「フランスでは昔からそう言うから」という解釈だが、アルタミラ洞窟のような感覚を内包する私は「ケルト人の畏怖(畏敬)の伝承」として捉えていた。だがもしこれをキリスト教的に解釈すると、もう少し血の通った現実感が湧いてくると思う。そこでピアフ版と日本版を比較してみる。すると日本人の殆どは「私の愛は強い」と外へ向かって自己をアピールしているように見える。対してピアフの歌は現世でいかなる外圧がかかろうともこの愛は揺るぎないという確言に思える。「私たちの愛だけが存在」する歌か「対価なき愛そのもの」の歌か。

日本の歌は「たとえ天変地異が起きたとしても、あなたに愛されていれば他のことは私には関係ないわ。あなたが望めばなんだって言う通りにするわ」で、ピアフの歌は「世界中のあらゆる逆風が襲ったとしても、私にとって大事なことは今あなたを愛し、愛されているということ。だからもしあなたが望めば私は恐れることなく何だっでしてしまおうでしょう」となる。世の中のことなんか無関係でどうでもよいのではなくて、世の中で何が起きてても他人にどう見られようとも覚悟ができて愛なのである。その立脚地の違いが甘い歌か否かの分かれ道であると思う。私は越路吹雪さんをフィルムの中でしか知らないが、その中で聴く限り甘く歌ってはいない。ただドラマティック表現のせいで女性のハートに「うっとり感」を残してしまったかもしれない。私はむしろ現代の原詩に近い訳詩で歌っているもののほうが「何だっでするわ」の意味の連なるところで、ほとんど例外なく微笑を浮かべるせいで「甘い」歌い方になっていると思う。そこが日本的なのだと思う。だから「ニコリ」「うっとり」を取り除いた歌い方をしない限り、原詩の言葉に近いからといって必ずしも原詩の心情を的確に伝えていることにはならないのである。そういう意味で岩谷時子さんの詩は表現上原詩とは鏡の表裏のような関係であるが、よく感情が要約されていると思うから好きなのである。ピアフの歌は甘くも激しくもない。清冽で静かで確実である。

さて、日本語表現で伝達が難しければ原語で...と考えると、私の知る範囲は狭いかもしれないが、日本人ではワサブローさんの歌い方が好きである。歌い出しの「Le ciel bleu」の言葉の中にすでに「空」でなく「天」の空気を感じるから。ただ感性は真似できない。だから源流へ辿り着く知識を積み重ねる努力が必要なのだろう。(2013.1.19)